

## 小学生課題① 「真」

(解説) 頼山陽の座右の銘は「真率」という言葉です。

「真率」とは「自分を飾らないこと」「正直でさっぱりしたこと」という意味です。山陽は人と接する時には、いつもこの言葉を忘れないように気をつけていました。また、山陽が弟子たちに漢詩を教えるのに、最も大事なものとして説いたのが「真」の一字で、真似をすることや嘘くさいことを厳しく戒めました。

## 小学生課題② 「忠孝」

(解説) 安永九年(一七八〇)十二月二十七日に大阪で生まれた頼山陽は、翌年、

祖父の惟清から「忠孝」の二字を書いた書をお願いします。その書は守り袋に入れられ、山陽は生涯それをお守りとして肌身離さず持っていました。そのため、山陽が亡くなった時には、字が消えかかっていました。その後、文字の輪郭だけを写し取った複製が作られました。

## 中学生課題① 「山紫水明」

さんしすいめい

(解説) 文化十一年(一八一四)十月、とも 鞆の浦(現在の福山市鞆町)を訪れた頼

おおさかや

山陽は、鞆の商人大坂屋が所有する建物について文章(漢文)を書くように頼ま

せんすいじま

れました。その建物が仙酔島を真正面に望んでいることから、山陽はそれを

たいせんすいろう

「対仙酔楼」と名づけました。その文章の最後には「山紫水明」という言葉が登場  
します。

けいかん

「山紫水明」とは「自然の景観が澄みきって美しいこと」を意味する四字熟語で、

よむ

頼山陽が作った言葉です。鞆で書かれたのが最初といわれています。

## 中学生課題② 「浩然之氣」

こうぜんのき

(解説) 「浩然の氣」とは天地間に充滿している至大至剛(この上なく大きく、

この上なく強いさま)の元氣(万物生成の根本となる精氣)のこと。行いが道義

(人の行うべき正しい道)にかない、心に恥ずることがなければ、その身に生じて

どんな困難に有っても決してくじけないといわれています。

中国戦国時代の思想家・孟子(前三七二頃〜前二八九)の言行や思想をま

もうし

わ

よ

わ

こうぜん

き

やしな

とめた『孟子』に「我れ善く吾が浩然の氣を養う」という一節があります。

頼山陽が好んだ言葉で、これを書いた一行書も残しています。



# 高校生課題① 「癸丑歳偶作」より四句

(解説)

頼山陽が十四歳の時に詠んだとされる詩の中の四句。詩集『山陽詩鈔』の冒頭に収録されています。

十有三春秋

じゅうゆうさん しゅんじゅう  
十有三の春秋

逝者已如水

ゆ もの すで みず  
逝く者は已に水の如し

天地無始終

てんち ししゅうな  
天地 始終無く

人生有生死

じんせい せいしあ  
人生 生死有り

安得類古人

いずく こじん るい  
安んぞ古人に類して

千載列青史

せんざい せいし れつ  
千載 青史に列するを得ん

(大意)

十三年の歳月が過ぎ去った。

水が流れるように過ぎ去って戻らない歳月。

始めも終わりもない宇宙(時間)にくらべて、人間には生死の定めがある。

どうか、いにしえの聖賢(聖人・賢人)のように、永久に歴史書に記される

ような人物になりたいものだ。

## 高校生課題② 「不識庵 機山を撃つふしきあん きざん うの図ずに題すだい」

(解説)

「不識庵機山を撃つふしきあん きざんの図ずに題すだい」という七言絶句です。

上杉謙信うえすぎけんしん(不識庵と号す)と武田信玄たけだしんげん(機山と号す)が死闘しとうを繰り広げた

川中島の合戦かわなかじま かつせんを詠よんだ詩しです。詩吟でもしばしば詠じられ、山陽の詩のなかでは最も有名な作品です。

鞭聲べんせい肅々しゆくしゆく夜過よる河かわ  
曉見あかつき千兵せんべい擁大牙たいが  
遺恨いこん十年じゅうねん磨一劍いっけん  
流星りゅうせい光底こうてい逸長蛇いっ

鞭聲べんせい肅々しゆくしゆく夜よる河かわを過わたる

曉あかつきに見るみ 千兵せんべいの大牙たいがを擁ようするを

遺恨いこんなり 十年じゅうねん 一劍いっけんを磨みがき

流星りゅうせい 光底こうてい 長蛇ちやうだを逸いっす

(大意)

(上杉勢は)鞭むちの音も静やいかに、夜陰やいんに乗じて河を渡った。

明け方たいしやうばたになって、大将旗たいしやうを押し立てた数多の軍勢が(武田勢の)眼前がんぜんに現れた。

(上杉謙信は)十年間研ぎ澄すました一劍いっけんを提ひげて敵陣てきじんに切り込み、打ち下ろした剣光けんこうが流星りゅうせいの如ごとく一閃いっせんしたが、無念むねんにも強敵きやうてき(武田信玄)を取り逃にがしてしまった。

# 高校生課題③ 「郷きょうに到いたる」

(解説)

文政八年(一八二五)十月六日、頼山陽(当時四十六歳)が京都から広島に帰省し、広島城下東端の猿猴橋えんこうばしにさしかかった時に作った詩です。頼山陽は母を想う詩を数多く残しています。本作では母を想う素直な心情が飾ることなく表現されています。

猴子橋頭生暮煙  
已看兩岸市燈懸  
同人莫恠吾行疾  
欲及萱堂未就眠

猴子橋頭 暮煙 生じ

已すでに看みる 兩岸 市燈りょうがんの懸しとうるを

同人 恠あやしむ 莫なかれ 吾わが行こうの疾はやきを

萱堂けんどう 未いまだ眠ねむりに就つかざるに及およばんと欲ほっす

(大意)

猿猴橋えんこうばしのたもとには夕もやが生じ、すでに兩岸には街灯がともっているのが見える。

同行の人よ、私の足どりが早いのを怪しまないで欲しい。母が眠りにつかないうちに家に着きたいのだ。

# 高校生臨書課題① 「泊天草洋」

あまくさなだにはくす

(解説)

頼山陽は、文政元年(一八一八)の九州旅行の際、長崎に約三か月間滞在した後、八月二十三日に舟で熊本へ向かい、その途中天草富岡(現在の熊本県天草郡苓北町)に一時停泊しました。その間に天草洋の風景を詠んだのがこの「泊天草洋」という詩です。山陽の九州周遊中の作品の中では最も有名な詩です。

雲耶山耶呉耶越

くも やま ー ー えつ  
雲か山か呉か越か

水天髻髻青一髪

すいてんほうふつ せいいつぱつ  
水天髻髻 青一髪

萬里泊舟天草洋

ばんり ふね はく あまくさ なだ  
万里 舟を泊す 天草の洋

煙横篷窓日漸没

けむり ほうそう よこ ひ まうや ほつ  
煙は篷窓に横たわりて 日 漸く没す

瞥見大魚波間跳

べっけん たいぎょ はかん おど  
瞥見す 大魚の波間に跳るを

太白當船明似月

たいはく ふね あ あき  
太白 船に当たりて 明らかなること

つぎ に  
月に似たり

(大意は裏面に)

(大意)

あれは雲だろうか、山だろうか。山だとすると、呉の国だろうか、越の国だろうか。そう思われる髪の毛一筋ほどの青い線が、海と空が接するあたりにほのかに見える。

私は今、長旅の途中、天草の海に舟泊まりしているのだが、海を這う<sup>ほ</sup>タもやは船窓の向こうにたなびき、日は次第に傾いて、海に沈んでいった。

(船窓にもたれて暮れゆく海を眺めていると)大きな魚が波間に跳んで<sup>と</sup>姿を消すのが一瞬見えた。あとには、船の正面に宵の明星<sup>よい</sup>(金星<sup>みようじょう</sup>)が月のように明るくまたたいている。

## 高校生臨書課題② 「外史脱稿戯作」

がいしだつこうぎさく

〔修史偶題十一首之一〕

(解説)

頼山陽が歴史書『日本外史』編纂の感想を詠んだ七言絶句十一首の裡の一首です。文政十年(一八二七)、四十八歳の作とされています。

歴史書の執筆に心血を注いだ山陽の心情が伝わってきます。

二十餘年成我書

二十餘年 我が書を成す

書前酌酒一掀鬚

書前酒を酌いで 一たび鬚を掀ぐ

此中幾個英雄漢

此の中の幾個の英雄漢

諒得吾無曲筆無

吾が曲筆無きを 諒得するや無や

(大意)

二十余年の歳月を費やして『日本外史』は完成した。

この書を前に、酒を注いで神靈を祀り、心ゆくまで杯を傾けた。

この書の中には幾多の英雄たちを描き出しているが、彼らは私の筆に曲筆

(事実を曲げて書くこと)のないことをわかってくれるだろうか。